

児童文化運動が地域社会にもたらす効果に関する一考察

—— 飯田子どもまつり30年が育んだもの ——

松 崎 行 代

A Study on the Effects of Child Culture Movement on the Local Society

—— What Iida Child Festival Brought Up after a Lapse of Thirty Years ——

Yukiyo MATSUZAKI

要旨：長野県飯田市において毎年春に開催されている飯田子どもまつりは、1975年の第1回から継続開催され、2004年30回を数えた。これを機にまとめられた記念誌編集によって収集された記録資料および関係者の証言から、市民による実行委員会体制の変化やそれに伴うまつりの変遷が明らかになった。そこで30年の歴史を振り返り、このまつりが子どもや実行委員にもたらしたものは何であったか検証した。児童文化運動として始まったこのまつりは、子どもの幸せを願う子どものための児童文化運動であったが、実行委員にとっては、彼らの自己実現の場であり社会教育活動の場でもあった。子どもと大人がかかわりあう中で生じる相互の育ち合いは、今後の社会教育活動の展開においても重要な観点になる。行政との共同の中で今後さらに児童文化運動が活発に展開されることが望まれる。

Key words：児童文化運動 (child culture movement), 遊び (play), 市民運動 (citizen movement), 社会教育活動 (social education activity), 行政 (the administration)

はじめに

春の様相が満たされる4月下旬、長野県最南端の街飯田市において、飯田子どもまつりが毎年開催されている。例年、会場となる市内の公園には親子連れを中心とした市民が1,000人程集まり、スタッフが設営した10余りの遊びのコーナーを一日通して楽しんでいく。子どもはもちろん、保護者の大人までもが時間を忘れて遊びに夢中になる姿が毎年見られ、印象的である。

この飯田子どもまつりは、1975年(昭和50年)に第1回目をスタートさせ、2005年(平成17年)の実施で31回を数えた。四半世紀を優に越え春の恒例行事として飯田の地に根付いたこの催しは、開始当初から市民による実行委員会

体制の中で企画運営され現在に至っている。筆者は子どもに関する活動への関心から実行委員となった。そして、まつり当日は、学生数十名を引率して毎年参加している。

2004年(平成16年)、飯田子どもまつり第30回の記念の節目を迎えるに当たり、実行委員会では30年間の歴史を一冊の記念誌にまとめ、『飯田子どもまつり 30年のあゆみ』¹⁾として発行した。散逸していた記録資料等を收集整理し、また、開始当初を知る方々に第1回始まりのいきさつや当時の様子についてなど座談会にて語っていただいた。

筆者もこの編集委員の一人として記念誌編集に携わり、30年に及ぶ歴史の中でこの活動が変遷してきた過程と、消滅することなく現在に至っている状況、また、その時々の実行

委員会のメンバーのこの催しに寄せてきた想いを知ることが出来た。そして、1970年代の高度経済成長という社会の大きな変化の中で、子どものよりよい成長や豊かな生活を保障することを願った運動や活動が各地で誕生する中、飯田で生まれたこの飯田子どもまつりも、単なるお楽しみイベントではなく、市民による草の根的な児童文化運動であったことが明確化され、現在かかわっている実行委員は改めて自身がこの活動に参加する意識や姿勢について見つめなおす機会となった。

今回『飯田子どもまつり 30年のあゆみ』という貴重な資料を基に、あらためて子どもまつりが誕生した背景から、この活動の持つ児童文化活動としての理念を明らかにするとともに、30年の変遷の過程から、この活動が実行委員にとってどういう場であったのか、社会教育の視点からの検証も重ねて行いたい。その上で、今後このような子どもから大人までが広くかかわる活動の更なる展開の方向性を探りたい。

1. 日本における子どもまつり誕生の背景とその理念

一 児童憲章の実現を目指した児童文化運動として一

日本子どもを守る会によって発行されている『子ども白書』は、1952年（昭和27年）の同会結成から12年を経た1964年（昭和39年）6月14日に創刊され、現在に至っている。その目次をたどると、1964年の創刊当初は、全体的には児童福祉や教育の領域に大きく傾いた内容で、子どもの文化に関する領域の取り組みはほとんど見られなかった。しかし、1974年版白書からは、児童福祉、教育の領域と並び、児童文学・親子読書・子ども劇場・伝承文化などを含む子どもの文化の領域が登場し、子どもの文化に関する実態と運動が大きく取り上げられ、合わせて、子どもと地域に関する領域も設けられるようになった。そして、

1978年版白書においては、「5. 子どもと地域、その実態と運動」の最後の節に「子どもまつり」が取り上げられた²⁾。

それによると、「子どもまつり」という表現は1958年（昭和33年）ごろから使われ始め実質的な地域の教育運動としてスタートしたとされ³⁾、日本における「子どもまつり」の誕生時期について触れられている。また、1978年（昭和53年）に日本子どもを守る会が東京で第21回子どもまつりを開催した折の羽仁説子実行委員長呼びかけの文章⁴⁾が紹介されているが、逆算すると、その1回目は1958年となり、つまり日本子どもを守る会が「子どもまつり」を考え出し、その後全国に展開していったと考えられるのである。

日本子どもを守る会は、1952年5月17日に誕生した。その前年、児童憲章が制定されたものの、戦後7年を迎えた当時の日本における子どもを取り巻く環境は決して望ましいものではなかった。「児童は人として尊ばれる」と児童憲章にはその理念が高々とうたわれてはいるものの、子どもたちを取り巻く生活・教育・文化・福祉・健康・環境の全ての面にわたって、児童憲章が踏みにじられている状況下にあったのである。この現実を無視できないとして、親や教師はもちろん、学生、研究者、専門家、地域活動家、市民団体、文化団体、労働組合などの多彩な顔ぶれによって結集されたのが、日本子どもを守る会であった。

会則には次のように基本目標が規定されている。

- 一、私たちは児童憲章を完全に実現するために国民的な運動をおこします。
- 二、私たちは日本国憲法にのっとって子どもを戦争から守ります。
- 三、私たちは子どもの幸福をはばんでいる悪い環境や条件をとりのぞくようにつとめます。
- 四、私たちは子どもが自分たちで強く正しく

明るくのびてゆく力を養うように助けます。
五、私たちはそれぞれの立場から愛情と知性と技術とをもってみんなの力で子どもの幸福をたかめます。

このように日本子どもを守る会は、子どもの権利と人権を保障する児童憲章の理念を実現し、日本が子どもを大切にす国になるために多岐にわたる人々が力をあわせ『子ども白書』の発行と、全国各地で子どもとともに多彩な活動をくりひろげ豊かな人間的出会いを実現させる活動を続け今日に至っている。

1952年に結成された日本子どもを守る会によって誕生した「子どもまつり」は各地の子どもを守る会によって徐々に広がっていった。そして、日本が高度経済成長を遂げる1960年代、人々の生活は豊かになったものの、60年代後半から70年代にかけて地域社会の変貌とマスコミ文化や情報メディアの普及のなかで、子どもの生活は激変し子どもの発達にさまざまな歪みを生み出していった。『子ども白書』に「子どもまつり」が取り上げられた1970年代後半、そうした状況に抗して子どもの権利を守ろうという人々が共同で、さまざまな子どもの文化運動と呼ばれる独自の文化運動として、親子読書運動や子ども劇場運動などが全国各地で展開していき、「子どもまつり」もこの流れの中で一層の拡張がみられた。

2. 飯田子どもまつり30年の経緯

一実行委員会構成メンバーの変化と まつりの変遷一

①母親たちが熱くかわる児童文化運動 としての出発

「子どもまつり」という名称での催しが全国各地に広がりを見せ始めた1970年初頭、長野県においても1970年（昭和45年）に松本市において「第1回松本子どもまつり」が、翌1971年（昭和46年）には上田市において「第1回上田子どもまつり」が開催された。このような全国、県内の動きの余波を受け、飯田子どもま

つりも1975年（昭和50年）5月に第1回を迎えることとなる。

この第1回が生まれる背景には二人の人物の存在があった。一人は当時、飯田子ども劇場事務局の小木曾計男氏である。小木曾氏は、信州大学学生として松本子どもまつりにかかわった経験があり、前年1974年（昭和49年）4月に信濃毎日新聞社が持ちかけてきた飯田お練まつりに絡めた催事「ちびっ子野外劇場」を企画運営していた。

もう一人は、当時小木曾氏が事務局を務めていた飯田子ども劇場において代表を務め、併せて飯伊子どもの本の研究会にも所属していた熊谷孝敬氏であった。熊谷氏は、「(1974年に)発足したばかりの飯田子ども劇場で何かやりたい、読書運動の盛り上がりを見せるこの地で、松本子どもまつりのようなものが出来ないか」と密かに想いをめぐらしていたそうである。そして、なんの青写真もないまま、1974年夏、「来年の子どもの日には何かやるぞ!」と飯田文化会館全館の使用許可を得たというのである。

熊谷氏は、小木曾氏が企画運営した「ちびっ子野外劇場」終了後、飯田子ども劇場機関紙『赤石てんぐ第3号（1974年6月発行）』に「信毎主催ちびっこ野外劇場に参加して」と題し、次のようなコメントを寄せている。

「(前略)飯田には思い切って飛びまわれる大きな広場がありません。日頃からみんなと一緒に遊んだり自分の手で何かを作ったりする機会の少ない子どもたち。そんな中でこうした企画は今後もおおいに広めていきたいものです。

全国の子ども劇場では、『子どもまつり』という名でこうした行事を行っています。親子一緒に、青空のした、自分たちの力で考えて企画していく…。『ちびっこ野外劇場』をつくる中で、こんなことを考えました。」

松本子どもまつりを経験してその企画運営の実践的な知識を持つ小木曾氏と、地元の子

ども劇場や子どもの本の研究会にかかわり、母親達とのつながりの中で児童文化運動への想いを持った熊谷氏の両者が連動し、1975年（昭和50年）に第1回飯田子どもまつりを誕生させることになる。

そして、当然、二人が所属していた飯田子ども劇場と飯伊子どもの本の研究会が全面的にかかわり、実行委員会が成立する中で飯田子どもまつり誕生への本格的なスタートが切られた。それは、1975年4月10日、飯田文化会館使用許可を得た開催予定日5月5日からすでに1ヶ月を切った時点でのことであった。この日、飯田市図書館において飯伊子どもの本の研究会のメンバー、飯田子ども劇場のメンバーそして図書館職員が集まって協議する中、飯田市図書館の全面的協力を得て、両会が実行委員会として主催する形で第1回飯田子どもまつりを実施することが決まったのである。

30周年記念誌編集のための座談会で交わされた話によると、予算も無い状況においての第1回開催は、遊びに用いる材料は市内のタイル店、文具店、材木店の協力を得て処分するようなものを譲り受けたり、自然物は捜し歩いて調達するなど、実行委員メンバーのまさに人力に依るところが大きかったようである。

子どもまつりは子どもの日の制定に合わせ、子ども月間運動（5月3日～6月1日：国際子どもデー）の中の大きな行事として全国的に5月5日に開催されることが多かったが、飯田においてもその趣旨を引き継ぎ連休最終日の5月5日に記念すべき第1回を開催したのである。

会場となった飯田文化会館には予想をはるかに超えた5,000人の参加者が詰めかけ、ホールで午前午後の2回上演された映画は毎回1,300席満席で、鑑賞できない参加者のために急遽屋外での人形劇の上演を追加するなど対処し、創造・創作の広場においても風車、紙飛行機

作りの材料を追加するなど対応に追われた。また、「読書としつけ」と題して画家の北島新平氏の講演、海外絵本の展示など、子どもの本の研究会がこのまつりの主催としてかかわっている特色が現れた内容であった。

第2回からは、1回目に結成された飯田子ども劇場と飯伊子どもの本の研究会の二つの会による市民の実行委員会の主催に、飯田市教育委員会が共催として名を連ねるようになり、母親・青年・保育者といった一般市民の他に、市の職員や体育協会、消防署などの組織動員も加わり、スタッフは100名を超えるようになった。また会場も、文化会館だけでなく今宮球場、丸山公民館、中央公園、飯田市公民館、飯田東中学校、丸山小学校と複数の会場での分散開催となり、参加者も10,000人を超えるまでに拡大した。

スタッフは市職員の動員で大幅に拡張したが、実態はその多くが当日の動員という形であり、企画準備段階からまつりの原型を作り上げていったのは市民による実行委員会スタッフの子ども劇場と子どもの本研究会の母親や青年たちであった。

この時期、各地で児童文化運動を展開していった原動力となったその中枢は、母親たちであった。飯田においてもそれは同様であった。子どもまつり実行委員会に加わった飯伊子どもの本研究会は、当時全国的な盛り上がりを見せていた石井桃子を中心とした読書運動の精神を受け継いで活動を展開していた。その思想は親が良い本を読んでいるだけではなく、子どもに良い本を読んで聞かせよう、子どもに良い本と出会わせようという児童文化運動であったのである。この地において当時母親や女性が行政に対し陳情を行うようなことは考えにくいことだったが、子どもの本研究会や地域文庫では図書館の設立を市へ陳情したり、1977年（昭和52年）には、やはり母親達を中心となり児童館設立の陳情を市に対し行った。こういった動きは飯田市におい

て女性が行政・政治にかかわり始めたきっかけだったと言える。

子ども劇場も子どもの本の研究会も、子どものより良い成長発達を願う想いを持った文化運動として活動していたため、共通した趣旨を持つ子どもまつりへの参加は、ごく自然な流れの中で進んだようである。

この時代、テレビっ子現象が現れ、遊び場の減少や塾通いなどから、遊ばない子・遊べない子の姿が取り上げられるようになり、また、少年犯罪が社会問題化され始めた。飯田においても刀狩りと称して学校における持ち物検査が実施されたり、また、市内数箇所に団地が造られ始め、遊び場を求める子どもたちの姿に母親たちが懸念を抱いていた。転んでも手が出ない子ども、危ないからといわれ刃物を取り上げられ自ら創り出す喜びを知らない子どもたちに、もっと自分の身体を動かし、心を動かし思い切り遊んで欲しい、そのような想いが、子ども劇場や子どもの本の研究会に参加する母親たちの胸の内には強く存在し、子どもまつりの実現の想いを強くした。

こうしてみると、子どもまつり自体は一つの児童文化運動として生まれその意義を持っていたが、そこにかかわる人たちの姿から捉えると、当時の飯田子どもまつりには婦人文化運動の精神が流れていたと言える。かつては現在ほど母親が就労についていなかったこともあり、こういった形で社会とのつながりを求め、そこでの社会参加・自己実現を求めた婦人の社会活動・社会教育の場でもあったのである。

飯田子どもまつり誕生に際しこうした母親を中心とした婦人の底力があったことが、旗を振った熊谷氏と小木曾氏を先導者として、資金が無い中10,000人を超える参加者を迎え入れるおまつりを成功させ、その後ますます発展の方向へ向け、進んで行くことが出来たのである。

その後、回を重ね拡大していった飯田子ど

もまつりは、5回から10回の経過の中で、当初児童の母親だったメンバーが子どもの年齢が上がるに従って、この催しから少しずつ距離を置くようになり、実行委員会は青年達の力を中心とした運営に変化を遂げていく。

②青年を中心とした市民有志による実行委員会再編と規模の縮小化

いくつかの会場による分散会場での大規模な開催が続いた飯田子どもまつりは、国際児童年でもある1979年(昭和54年)の第5回開催を前に統一会場での開催が提案され、飯田市松尾地区の総合運動場が会場となった。5,000人、7,000人、10,000人と、第1回から回を重ねるごとに増大した参加者を一同に会することが出来る場所であったこと、また、当時は体育協会の動員スタッフが多かったため体育系の遊びが取り入れやすい場所であったことが、会場決定の要因として大きく作用した。

しかし、この頃から大規模化した参加者受け入れに対して、企画からの実行委員の人数が少なく細部にわたる内容の検討が不十分であること、その分当日のみに近いスタッフへの依存によって活動がマンネリ化してきてしまうことなどが問題となっていた。市民の手による想いを実現する子どもまつりの在り方を再検討する時期にさしかかっていることを、実行委員会メンバーは感じていた。7回・8回を数える中で、今後子どもまつりをどう変えていくのかが検討され始めた。その中で討議された中心課題は、会場の選定について、新たな実行委員会組織の再編であった。

大規模化した参加者収容を優先させた会場の選定から、このまつりの趣旨である子どもが遊びをつくり出す喜びを味わうことが出来る場所を見つけることへみんなの目が向けられた。この時期、飯田子どもまつりの影響を受けたのか類似した子どもの催しが市内各地で開催され始め、飯田子どもまつりが一身に背負い規模を縮小しないまま続ける責任は小さくなっていた。そこで浮上したのが飯田市

丸山地区にある風越山麓公園であった。山の斜面に造られた公園は三段に整地された芝生で起伏があり、会場は上からの視線で一目見渡すことが出来る。市街地から少々離れた一会場での開催は参加者を減少させることになるが、それは逆に体育協会などの市職員の動員を得ない真の有志市民による実行委員会で責任を持って運営できる規模のまつりを実現させることになる、そう結論を出したのである。そして実行委員会組織も再編された。発足当時からの、飯伊子どもの本研究会や飯田子ども劇場という市民の団体を中心にした実行委員会、および共催として協力を得ていた教育委員会関係部署からの動員によるスタッフの確保から、純粹に飯田子どもまつりの趣旨に賛同して集まった子どもまつりをやりたいという個人の実行委員によって構成された実行委員会体制に改めることになったのである。これ以降、実行委員の確保は公募と実行委員による個人的勧誘によることになった。

こうして10回を迎えた飯田子どもまつりは、実行委員会の再編と会場の変更および規模の縮小化という大きな変革を遂げ、多くの母親たちによって企画運営されていた子どもまつり実行委員会の中心は、青年たちへと様変わりしていった。開始当初から「子どもたちの自主性を尊重し、自分たちのやりたいことを思い切りやって楽しむ」・「～してはいけませんの無い」まつりであったが、青年が中心になった実行委員会による子どもまつりは、実行委員自らもこの精神でまつりを楽しもうという雰囲気の色濃くなったようである。そして、子どもを楽しませようという視点からのスタートではなく、先ずはまつりをつくる自分たちが楽しもうというスタンスからの子どもまつりがつくり出されていった。そこには主体的に一個人としてこの活動にかかわったメンバーだからこそ、自分たちが義務感でやらされているようなおまつりが楽しいものになるはずがないという想いが感じられる。

このような青年を中心とした自由な雰囲気の子どものまつりは、第15回に予想もせぬトラブルに巻き込まれ、改めてこの活動に加わった実行委員がこのまつり・活動に寄せていた自らの想いやまつりの目的を再認識することとなった。

それは、当時風越山麓公園を会場としていた二つの催事が共催を求めてきたことによる。青年会議所と丸山地区自治会を中心に開催されていた「子どもわんぱく相撲」と「植樹祭」は、どちらも5月の連休前後に開催され、主体はそれぞれ相撲大会と植樹であるが、お楽しみとしてのイベントも同時に行われていた。このお楽しみのイベントとして子どもまつりの共同開催が第10回を前に持ち掛けられた。この時は調整がうまくいかないまま、試みとして会場と日を同じくしたという形だけの共同開催を妥協して行った。しかし、これは自分たちの意にそぐわないという結果から翌年は別開催とした。ところが、15回を直前にして、再度丸山地区自治会から要望があり、すでに数ヶ月前から決定し準備を進めていた日程を変更しての共同開催を強く迫られ、公園の使用権にまで話が及ぶ事態に陥ったのである。

当時の、共同開催が出来ないことを伝え公園の使用許可を求める意見文書には、強引な日程変更、公園の使用権を当事者の飯田子どもまつり実行委員会を介さずに、自治会と飯田市との間で検討している不当に対しての異議と、この実行委員会がどのような目的でこのまつり・活動を実施しているかが以下のように述べられている。

「子どもまつりのスローガンは、『つたえよう君たちに手づくりの楽しさを』ですが、これには二つの意味があります。

一つには子どもたちに買い与えただけのおもちゃではなく自分の頭や手足を働かせ作ることの喜びを味わってもらう。そしてもう一つは、実行委員一人一人に対して言った言葉

でもあるのです。あそびの研究から企画・準備・当日の運営までを実行委員一人一人が主役となり手作りであつりを成功させることを目的としています。はでさや大きさはなくても、一人一人がやり終えた喜びを感じられるようなまつりにしたいと思っています。つまり、単に子どもたちに楽しさを与えるというだけでなく、実行委員も育てるという社会教育的な立場で行われているのが現在の『子どもまつり』です。」

組織に縛られない市民の実行委員会体制の中で順調に10回を数えたこの催しは、かかわる実行委員自身も楽しく気ままにやってきたように感じていた。しかし、この二つの申し入れに対応する中で、子どもまつりの意義とあるべき姿を再認識することとなった。それは儀式的なセレモニーやイベントには馴染まないこと、添え物ではなくまつり全体が子どもまつりとして取り組まれてきたこと、その形の中で自分たち自身が自己実現を成し得たいと考えていることなどであった。子どもまつり開始当初は母親たちの自己実現の場であった子どもまつりは、ここにおいては、かかわる多くの青年たちの自己実現の場となっていたのである。

③市民実行委員会体制の成熟と拡充への課題

上述の共同開催から風越山麓公園の使用権にまで及んだ第15回は、無事計画通りの日程での単独開催が実施できたが、この問題から会場は再度検討され、第16回からは「扇町公園四季の広場」となった。その後、この公園は飯田子どもまつりの開催場所として定着し、この公園の地形を活かした遊びのコーナーが生まれ、その後の長い期間まつりを賑わすことになった。隣接する飯田市動物園につながる斜面の竹林から切り出した竹による竹細工、公園中央に位置する階段を観客席にした野外発表ステージ(図1)、自然発生的に起こる芝滑り、公園周囲の動物園や神社をコースに

入れたウォークラリー、そして、細い竹棒にパン生地を巻き付けて炭火で焼くパン焼き(図2)、炭で熱した五寸釘を鉄道レールの上で熨して作るペーパーナイフ作り(図3)など、10年以上続く定番コーナーは毎年人だかりが耐えない。

多くの定番コーナーが設営されるにはそれだけの実行委員スタッフの確保が必要になるが、第12回から開催されてきた「飯田子どもまつり遊びの教室」の活動はまさにこの問題



図1 野外発表ステージ



図2 パン焼き



図3 ペーパーナイフ作り

を視野に入れたものでもあった。この遊びの教室は実行委員のスキルアップと遊びの幅を広げること、そして新たな実行委員確保という目的のために創設された。大人対象として、年一度の予定で開催され、講師を招きやってみたい遊びを実践してみるというものである。日常的には子どもとかかわりを持たない人であっても、例えば木工やジャグリングに興味があるといったところから仲間に加わってくれることが期待され、実際何人もの新メンバーの加入をみた。しかし、実際のスタッフ拡充には、職場の同僚、他のボランティア活動の仲間、趣味の仲間への個人的な勧誘の方が効果を発揮していたようである。20回を数える頃には、スタッフも20代30代の青年層を中心に30人ほどが固定化して参加し、活気ある実行委員会が構成されていた。

しかし、25回を過ぎたあたりから、約半年前に本格的に取り組み始められる次年度の子どもまつりに向けての企画会議への出席者が減少の傾向を見せ始めた。バブル崩壊後継続する景気の低迷や、年齢を重ねたことで職場での責任も重くなったなど、仕事と社会活動の両立の困難さが理由の一つに挙げられるように思う。しかし、そうした私的な理由ではなく、実行委員会内の問題もあったように考えられる。それは、定番化された遊びのコーナー増加のためのマンネリ化である。子どもまつりの顔ともなるような定番化された遊びのコーナーを期待して来てくれる参加者がいることから、ほとんどのコーナーはそのままの形で実施されるようになる。すると経験を重ねた実行委員が多いことが裏目に出て、準備から討議を重ねていく必要性を感じないという状況が生じていたのではないだろうか。新しい遊びのコーナーを積極的に考え出すことのないマンネリ化を感じる雰囲気の中で、実行委員としてのやり応えを味わうことが少なくなっていたと考えられるのである。

そんな不安因子を有する実行委員会に、さ

らに大きな問題が突きつけられた。30回の記念の年を迎えるにあたり、今まで共催に名を連ね、補助金の助成をしてきていた飯田市教育委員会から、「行政からの自立をして欲しい。段階をおって補助金をなくす方向であること」が伝えられた。飯田市全体の財政が厳しい中、さまざまなところで補助金のカットが行われているようであった。

チラシの紙代・印刷代、廃材等では補えない材料の購入費などに当てていた補助金は高額ではない。しかし、そのお金を確保するための活動を行いながらまつりの企画運営をするということは、数倍の負担が実行委員会にかかることは目に見えていた。実行委員会は、子どもまつりの実施に対して100パーセントエネルギーを注げることに感謝し、30年間順調にこの活動が継続できたのも行政の協力があったからだと考えていた。そんな実行委員会に、補助金カットの話は大きな衝撃を与えた。実際問題として、資金面の工面も行いながらまつりを行うことが出来るのか、補助金がないなら無いなりに規模を縮小したり参加費を徴収する形で実施するのか。そしてまた、補助金カットということ以上に「行政からの自立」という言葉に対し、いったい何をもって自立というのか、自立するとは資金面での独立が全てのような印象に実行委員会は困惑し、行政と市民活動の関係、市民活動の目的やそこへの行政のかかわり方に関して疑問を感じないわけにはいかなかった。

そして、その中で改めて子どもまつりを行う意義、目的、それぞれの実行委員の気持ちが見つめ直された。「始めた当初の30年前と比べると現在は子どもを対象とするイベントが各地で開催されている。しかし、子どもまつりは役割を終えたのではなく、子どものために、できる限り、できる範囲で子どもまつりを続けていこう」、「すべて自立するのではなく、市民の実行委員会と行政が一緒になってつくっていく体制が大切なのではないか」

協議の中でこうした方向に意見がまとまっていった。そして、担当職員の尽力にもよって、30回は予算減額のないまま実施することとなった。

児童文化運動は、運動なのである。運動とは目的を達成するために行うものである。目的でもある実行委員会の想いが達成されたと思う時にはこのまつりは消滅するだろうが、今はまだその時ではないということであった。

3. 飯田子どもまつりが育んだもの

①児童文化運動の側面からの検証

—子どもまつり1日の感動が残りの364日の生活に—

1960年代に全国的な展開を始めた「子どもまつり」が、飯田市において1975年に誕生し30年が過ぎた。前章で述べたように、会場や規模の変化を遂げながら回数を重ね、折々に遭遇する出来事の中で、このまつりの意義やかかわる実行委員の想いを確かめ合いながら現在まで市民による実行委員会体制によって継続されてきた。

第10回・15回の風越山麓公園を会場にした際の、他団体・他催事との共同開催の拒否、第30回を前にした補助金カットの提言に対する話し合いが導き出した継続の道。そこから改めて確認されたのは、飯田子どもまつりの児童文化運動としての意義であった。

資料として残る、第1回子どもまつりアピール文は次のようにまとめられている。

「あれはいけません、これもいけませんとばかり言われている子どもたち。テレビやマンガにくぎづけになっている子どもたち…。狭い遊び場に押し込められている子どもたち。いつも『勉強しなさい』と言われている子どもたち…。

子どもたちをめぐる状況はまさに危機とさえ言われています。集団で遊ぶことを忘れ、一緒に感動する機会が無く、思考する事も少ない。こういった子どもの環境をよそに『そ

れでも子どもはエネルギーに生きている』と言って放っておくことは、未来を担う子どもに対する社会的な責任を放棄したことになるのではないのでしょうか。

そこで子どもたちに夢と希望を与え、仲間の尊さと創造の喜びを教え、良い文化環境とは何かを具体的、実践的に示す、単なるおまつりの行事ではなく、親子で自主的に参加して創りあげていく、そういった総合的な児童文化祭、ひいては児童文化環境作りを目指すため、子どもまつりを企画し、定着させていきたい。」

また、第5回のアピール文には、1972年版の『子ども白書』にある次の文⁵⁾を引用し最後に書き加えている。

「(前略) 子どもまつりは単なるお祭的な行事ではありません。5月5日の感動が残りの364日の生活の中に何らかの形でこり、生かされるまつりにしなければなりません。」

実行委員は半年以上かけて想いを込め準備に取り組んでいるが、それを体験する子どもたちにとっては、それはたった一日のものである。実行委員の想いがどれだけ子どもたちの生活に反映されるか、我々の活動は児童文化運動としてどれほどの価値をもっているのか、数字で表すことは難しいこのまつりの意義を、実行委員として企画から当日の運営までかかわる筆者の経験を織り交ぜながら、子どもたちがこのまつりを通して体験したことを検証し、児童文化運動としてのこのまつりが年に一度この地で開催されている価値についてまとめたい。

・主体性を発揮して遊び込む

高度経済成長によって、我々の生活のあらゆる面が商品文化に包括された。子どもの遊びにおいても、かつてはおもちゃを自分で作り、作ること自体が楽しい遊びであった。しかし現在の子供たちは、商品であるおもちゃを購入し、型にはまった遊びに終始せざるを得ない状況の中で生活している。遊び自体が

本来は生活の中で自由に発想され実現化されていくもの、つまり遊びの主体者である子どもによってつくり出され遊び込まれるもののはずであった。頭も心も身体も鋭敏に働かせ、考えたり感じたり戯れたりすることの面白さが遊びの誕生といえる。そして、子どもたちは遊びを通して心を豊かに育て、さまざまな知識を得、身体を健やかに伸ばし、また人とかかわる力を身につけ、人として生きる力を育んでいくのである。

物質的な豊かさ、便利さが私たち人間から奪っていったものは大きい。そして発達過程にいたる子どもたちにおいては、大人がその影響を十分に理解し望ましい環境を確保する義務がある。一見無駄に見える、あるいは意味の見つからないような行動の中にこそ、大切なものが含まれているのである。

「早くしなさい」「そんなことが何の役に立つの。勉強さえすればいいの」は、子どもの主体性を奪い、自らの気づきの機会を奪った。子どもは本来、自分の周りのものに興味関心を寄せ、自ら働きかけ、そこから多くのことを学ぶ力を持っているのである。

子どもまつりに参加する子どもたちは、水を得た魚のように生き生きと遊び込む。何でもやってみたい、やって面白いと感じたものはとことん遊びたい。炎天下の下、数時間でもブルーシートの上で木切れを用いて立体工作を続ける子どもの集中力と出来上がった作品の精巧さには目を見張るものがある。また、竹をのこぎりで切り、鉋で割り、小刀で削る、そんな道具を手にした作業工程の一つでさえ、息を詰めて時間を忘れて打ち込む姿がある。そして、そこに携わる実行委員のスタッフは、その場面こそが貴重な遊び込む姿であることを十分理解し、それを保障し支えているのである。

・さまざまな人との出会い

室内での個人遊びの多くなった子どもたちにとって、野外で大規模に開催される「飯田

子どもまつり」は、まさにお祭という非日常の場と言える。毎年飯田市を中心に1,000人を超える親子連れが参加し、10余りの遊びのコーナーはどれも多くの人々で賑わう。遊びを支えるスタッフは学生から高齢者までと年齢も職種もさまざまであり、また参加する子どもたちも学年や学区間の枠を取り払ってかわりあう。核家族化が進み、家族という小集団での密な人間関係、また保育園・幼稚園や学校においてもせいぜいクラスを単位とした友人集団を中心とする子どもたちにとっては、ある意味新鮮な人的環境に身を置く一日となっている。

中には親しい友達同士が誘い合って参加する子どもたちもいる、また中には家族で参加し同じ遊びに没頭する親子もいる、また、その場で出会った者同士が何らかのかかわりを持って共にその時を過ごすなど、直接的・間接的な人との出会いやかかわりが子どもまつりの会場には無数に巻き起こる。順番に待つ、年上の子どもが困っている小さな子どもに声を掛ける、お父さんお母さんあるいはおじいさんが自分の子どもや孫にこだわらず一緒に子どもの世話を焼いてくれる。そんな微笑ましかかわりがあちこちで見られる。こんな様子がごく自然に見られるのも、遊びの集結したおまつりの場だから、そして、一日たっぷり遊ぶことが出来る時間的なゆとりが保障されている場だからこそ可能になっているのではない。

参加無料で、遊びを楽しみに集まった子どもも大人も、そしてこの催しを運営するスタッフも、この日一日をここで楽しみたいという想いだけを共通に持つ人々が集まること自体が、一つの貴重な価値になっているように感じられる。

普段なかなか遊ぶことの出来ない親が子ども以上に遊びに熱中している姿は毎年見られる光景であるが、お父さんお母さんと十分に遊べた喜びを感じた子どもの満足感、また、



図4 竹細工：スタッフと子どもたち

遊び込む子どもの生き生きした姿や遊びの面白さを発見したお父さんお母さんの喜びは、お互いを結びつける貴重な体験としてそれぞれの人たちの中に貯えられるだろう。

また、楽しい遊びを一緒にやってくれたスタッフとの出会いは、非人間的な痛ましい事件が日常化しつつある現代において、人のあたたかさを感じるひと時になっているはずである。(図4)

②社会教育活動の側面からの検証

前項において、飯田こどもまつりが子どもたちにとってどのような体験をもたらしているかという視点から、児童文化活動としての意義について検証した。しかし、この活動が持つ意義については、もう一面、実行委員メンバーにとってこのまつりがどういうものであったかという視点での検証が必要である。そこには婦人や青年の社会教育活動の場としての意義が大きく存在している。

くらしの中で生まれ、育ち、くらしを豊かにする方向で取り組まれていく人々の自由で自主的な学習文化活動を広い意味で社会教育と定義づけると、実際に子どもを豊かに育てるいろいろな文化活動を起こすこともその中に含まれる⁶⁾。

飯田こどもまつりの誕生のきっかけは、前述したように熊谷氏や小木曾氏の子どもが楽しめる一日をつくり出したいという想いからであった。そこに、わが子のそして広く子どもたちの幸せを願う母親たちの想いが重なり、

具体的なまつりとして形づくられていった。母親たちは、子どもを育てる親だからこそ感じる子どもの生活・文化環境への不安を、このこどもまつり実行委員会に加わり活動する中でどうにかよい方向へもっていきたいと強く願った。その中で子どもの望ましい発達について、そのための環境について、また子どもに関するさまざまな法律についても触れることになっただろう。また、多くのメンバーである他の母親たちや動員された市の関係職員などと、人とのかかわりを広く持った。これは、その後に実行委員会の大半を占めるようになった青年たちも同様であって、興味関心の広がり、人間関係の広がり、それに伴う知識や体験の広がり、まさに社会教育における自己教育の実践だった。

友人に誘われたから、子どもとのかかわりを求めて、得意な技術を生かして人を楽しませたいなど、実行委員に加わった人々の動機も立場も年齢もさまざまであるが、こうした多種多様な人々が集まった関係の中で、メンバーは多くの発見と世界の広がりをみたのではない。発想の違い、価値観の違いも、この遊びが主体のこどもまつりの企画運営においてはとても重要なものであったことは確かである。自由な発想のもとで遊びは生まれ、そういった雰囲気の中で子どもはのびのびと振る舞い遊ぶことが出来るのである。

この実行委員会には何の束縛も無い、動機はさまざまであってもここに集まったメンバーは、「個人の意志により自分が楽しんでやりたいからやる」という想いにより参加している。つまり、自分の想いを持ちそれを実践に移して実現させる自己実現を目指しているのである。そして、この自己実現が独りよがりの自分だけの楽しみになっていない点が、それぞれを成長させる社会教育であり、その対象として多くの子どもたちがいる点が児童文化活動につながっている。

以前、演出家の平田オリザ氏があるテレビ

番組に出演し、この「自己実現」について、「他者を実現させてやるのが自己実現につながる。むやみに自分のことだけを考えた自己実現はありえない」と語った。

市民による実行委員会体制の中で、30年間この活動が継続されてきたのは、自由だからこそ個人の意志が尊重され、その自主性に任される中で個人は責任をもって取り組むという会の在り方があったからだと言える。遊びはやらされてやるものではないが、実行委員も組織に縛られたり義務感で行うものではないのである。

子どもまつりが定着化する10回頃までは、毎回の子どもまつり開催にあたって、中心になっていた実行委員が語り合い、その回のテーマ設定に時間をかけていた。そのようなことは以後次第に無くなっていったが、現実行委員それぞれの想いの中には、子どもたちと一緒に来た親たちに十二分に楽しんでもらえる一日をつくり出そうと、他者を思う想いの中で活動に取り組んでいる。まつりに参加してくれた人たちが喜んでくれたこと、一緒に楽しい時間が持てたことが、自己の向上や自己充実に結果的に結びついているのである。

30回を前に補助金カットの話がもたらされた際の話し合いは回数を重ねた。その中で、このまつりが飯田にあることの意味、子どもを中心に集まった多くの参加者と過ごす春の一日がどれほど楽しいか、できればやり続けたいという熱い想いが次々に語られた。同席した教育委員会の職員にもその想いが伝わり、最終的に補助金のカットは無くなり例年通りの開催が可能になった。

彼らの想いは、「楽しいから」という一点に集約され、その想いこそが子どもまつりをつくり上げている。そこには、実行委員相互の人と人の出会いと交流があることが大きな要素としてある。職場とは違う、地域の組織とも違う、さまざまな立場の人が「飯田子どもまつり」という活動のために心をつなげ、集

まっていることへの充実感や喜びがあるのである。このような交流の場があることは、それぞれの生活に張り合いと潤いを与えることになってはいないだろうか。子どもまつりで得たものが何らかの形で職場や家庭にもたらされその場を豊かにし、そしてまた、それぞれの職場や家庭の何かが子どもまつり実行委員会の活動にもたらされ、この会の活動を豊かにする。さまざまな人が集まり交流し一つのことに取り組むことは、社会や地域に必ず何かをもたらしていく。そんな中で一人一人がより生かされるのだ。

おわりに

飯田子どもまつりの歴史30年余を振り返り、この活動をつくり上げ継続してきた実行委員会の静かな、そして強い力を感じる。

現在の実行委員メンバーは約15名。この中には、開始当初から31年間ずっとかかわっている現実行委員長から、20年、5年、そして昨年入ったばかりという人までさまざまである。個々の私的な事情により続けられない状況になるなどメンバーの入れ替えは常にあり、最近ではメンバーの減少が課題となっている。そんな第32回目を迎えようとする今、また新しいメンバーが加わった。これは、まだまだこの活動に対し社会が何かを求めている、この活動がここに存在する意味を持続けていることを実感させてくれる。

前述したように、この児童文化運動である飯田子どもまつりは、婦人運動や大人自身の自分探しと自己実現の社会教育活動と融合している。子どものためだけでなく、大人のためだけでなく、結果的にお互いが影響し合い伸びあっていく活動となっていた。つまり、子どもたちには、大人が楽しむ姿があること、大人同士がかかわり、そのかわりによって影響しあっていく姿を子どもに示すことが出来れば、それは意味あるものとして子どもたちへのメッセージとなっていっているのでは

る。そして大人たちには、子どもたちを深く
支え激励していく文化が、大人自身の自分ら
しい生き方の選択という裏打ちを伴いながら
展開されていたということである。こうした
子どもと大人の相互作用の構造による社会活
動が、少子化や家族・個人の孤立化がいわれ
る現代において、ますますその必要性を増す
ことを感じる。

飯田子どもまつりは30回を前に、行政から
の自立を求められたが、果してこれからの地
域の発展・人の育成を考えた時、行政は文化
運動・文化活動や社会教育活動に対してこの
ような姿勢でいいのだろうか。日本において
は特に子どもの文化権に関する総合的な規定
が現行法体制の中には見当たらず、子どもの
文化活動への公的支援には多くの問題が現れ、
文化活動の広がりや高まりの間に大きなギャ
ップが生じている⁷⁾。

早期の改善と共に、行政がその活動の意義
と必要性を認め、柔軟な対応を施行してくれ
ることが望まれる。

児童文化政策として行政が行う上からの施
策では生まれ得ないものが、市民による児童
文化運動からは生まれているのである。子ど
もまつりという児童文化運動が、子どもの幸
せのためだけでなく、婦人の社会参加をもた
らし、青年の自己実現の場となり、地域にお
ける人々のつながりを広めたように、1+1
が3にも4にもなるような、思いもよらない
ものが生まれ年月を重ね大きく育まれるので
ある。

今後、飯田子どもまつりがその役割を終え

る時が来るのか、先のことは予想もつかない
が、この飯田子どもまつりという児童文化運
動が30年間この地で続けられてきた事実が、
この飯田が「子どもを大切にしている街」で
あるその一つの証となっていると考えたい。

謝 辞

共に『飯田子どもまつり 30年のあゆみ』編
集に携わり、今回の研究に際して、資料の使
用を快く承諾してくださった飯田子どもまつ
り実行委員会30年のあゆみ編集委員会の皆様
に感謝申し上げます。

注

- 1) 飯田こどもまつり30年のあゆみ、飯田子
どもまつり実行委員会30年のあゆみ編集
委員会、長野、2005。
- 2) 日本子どもを守る会：1978年版子ども白
書、1978。
- 3) 同上、p.219。
- 4) 同上、pp.220-221。
- 5) 同上、p.220。
- 6) 島田修一：くらしをひらき、地域をつく
る—社会教育の本質—。地域にくらしと
文化をひらく(島田修一編)、国土社、
東京、1987、p.13。
- 7) 増山均：子どもの文化権とアニメーション。
ファンタジー空間の創造—子どもの文化
権と文化的参加(佐藤一子・増山均編)、
第一書林、東京、1995、p.23。

図

図1～4は筆者撮影による。